

宇都宮市埋蔵文化財調査報告 第6集

水道山瓦窯跡群発掘調査概要報告

昭和56年2月

宇都宮市教育委員会

発刊にあたって

昭和54年、宇都宮市内の遺跡の中でも、古くから著名な水道山瓦窯群が諸般の事情により、埋め立てられることになりました。

当教育委員会では、埋蔵文化財を重視する立場から、瓦窯群が所在する土地の所有者及び文化庁、栃木県教育委員会をはじめとする関係機関と協議を重ね、昭和55年8月に発掘調査を実施いたしました。

発掘調査は、国土館大学教授大川 清先生を中心に、大門直樹、青木健二、田熊信之の各氏を調査員に、更に、国土館大学考古学研究室の学生諸君を調査補助員として委嘱し開始いたしました。

発掘は、湿地という最悪の現場にもかかわらず、精力的に進められ、短期間に多大な成果をあげて終了することが出来ました。

これは、大川先生をはじめとする調査に参加いただいた上記各位の熱意のたまものであり、心からお礼申し上げます。

水道山瓦窯群の発掘成果は、56年度中に発刊いたす予定ですが、とりあえず、そのあらましを概報として刊行いたすことになりました。

この概報も、発掘調査を担当していただいた大川先生におまとめいただいたものです。重ねてお礼申し上げます。

末文になりましたが、調査にあたり、御指導いただきました文化庁及び栃木県教育委員会、また、終始御協力いただきました土地所有者の中村 茂氏、大野照美氏、更にはなにかと便宜をお図りいただいた日本住宅公団、日豊工業株式会社に対しまして感謝の意を表します。

昭和56年2月

宇都宮市教育委員会

教育長 後 藤 一 雄

例 言

1. 本書は、宇都宮市中戸祭町内に所在する水道山瓦窯跡群の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、国庫補助金及び県費補助金の交付を受け、宇都宮市教育委員会が主体となり、同委員会が委嘱した大川 清氏（国士館大学教授）を担当者として、昭和55年8月に実施した。
3. 本概報は、大川 清、青木健二の両氏が執筆した。
4. 本調査の関係者は次の通りである。

発掘担当者	国士館大学考古学研究室主任	大川 清			
調 査 員	国士館大学考古学研究室技師	大門 直樹			
	日本窯業史研究所講師	青木 健二			
	考 古 学 研 究 者	田熊 信之			
調査補助員	国士館大学考古学研究室学生	宮重 俊一	伊東 但	足立 吉弘	
		吉岡 秀範	矢野 淳一	大信佐都美	
		高橋 二重	本村 修克	笠原 仁史	
		布川 靖敏	斎藤 光利	曾我 武	
		中山 哲也	石井 由美	高見沢ひで子	
		三上ひろ子	岩瀬 優江	土沼 章一	
協 力 者	栃木県教育委員会文化課職員	大金 宣亮	橋本 澄朗	尾島 忠信	
事 務 局	宇都宮市教育委員会社会教育課	社会教育課長	半田 昭		
		文化振興係長	河越 昌司		
		文化振興係	定岡 明義	桜井 敬朔	
			渡辺 卓	木村 光男	

目 次

- 発刊にあたって……………宇都宮市教育委員会教育長 後藤 一雄

- 例 言

- 図 版

- 1 はじめに……………4

- 2 調査経過と成果……………4

- 3 遺構と遺物……………5
 - (1) 3号窯跡……………5
 - (2) 出土遺物……………5
 - (3) ステ場……………6

- 4 むすび……………6

- 図



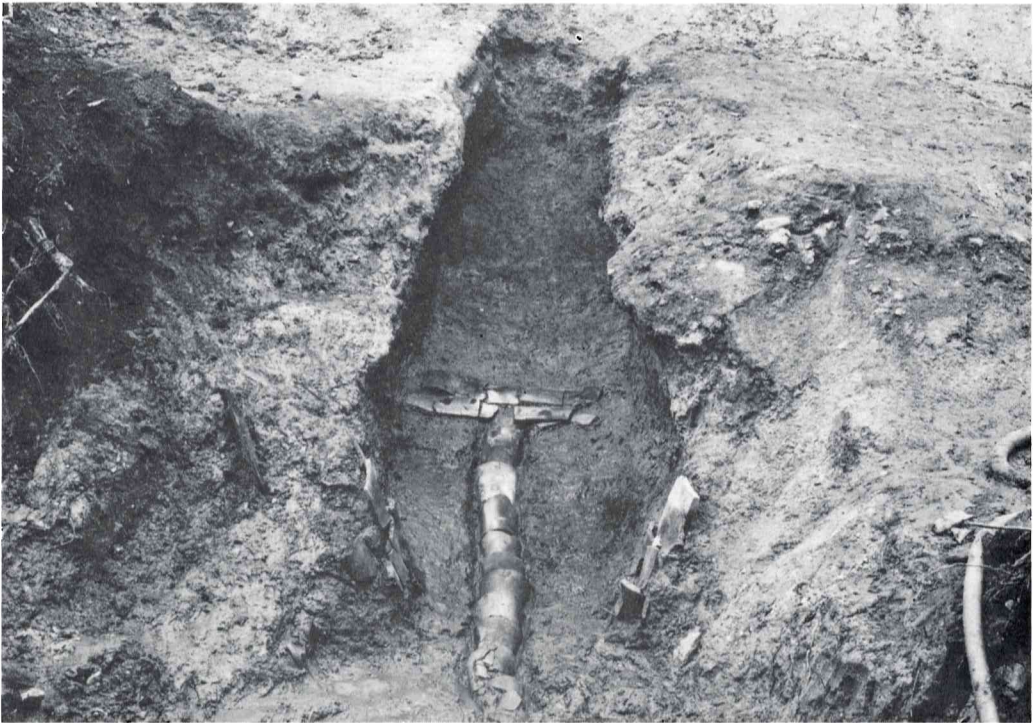
窯跡群遠景（左より3・1・2号窯跡）



3号窯跡全景



3号窯跡燃焼部



3号窯跡の遺物をはずした状態

1 はじめに

水道山瓦窯跡群は、宇都宮市中戸祭町中妻2902番地の水道山の南麓の西に開口する小さな谷の北側にある。

今回の調査は昭和37年、同52年の前2次期に引続き、第3次に相当する。

昭和37年度は早稲田大学考古学研究室学生諸君と共に大川が実施した。調査期間は約1週間で終了し、屋瓦片は1号窯跡の中へ埋め戻した（今回の調査で全部採集した）。この調査で窯跡2口（1・2号跡）を検出した。

昭和52年度は住宅公団による宅地造成に伴う事前調査として、1・2号窯跡より谷奥の東側が公団用地になっているので、その地域内に窯跡やそれに伴う遺跡の有無を確認することを目的として、栃木県文化課が主体となり大川が担当者となって実施した。その結果、第6トレンチで地下式登窯を掘さく途中で放棄したつくりかけの遺構を確認することができたほかは、遺構らしきものの存在はなかった。

今回、つまり第3次の調査は、第1次調査の1・2号窯のステ場の範囲と、それより西側に窯跡の所在を確認することを目的とした。

調査は宇都宮市教育委員会の委嘱により国士館大学考古学研究室が実施した。

（大川）

2 調査経過と成果

今回の調査地域の東側は、すでに住宅公団の宅地造成に伴う調整池の堰堤が完成し、また一方、反対の西側にはダンプによって廃土が棄てられ、まさに播鉢の底といった状態であった。調査時は晴天の少ない夏であったため、あたかも梅雨期のような気候であり、湧水と雨水の排水路が無いと、水が溜まって池のようになっていた。しかもそれに加えて廃土が雨水と共に流入して泥沼と化していた。湧水の一部については住宅公団の協力を得て排水したが、終日排水ポンプを使用していた作業であったことは特記すべきものである。

調査はパワーシャベルによって採取した泥を一回毎に調査しつつ、ステ場の範囲確認と遺物の採取を実施した。

1・2号窯跡のステ場と考えられる地区をAとし、さらにAより谷へ下った南東部分をステ場Bとした。1・2号窯跡の再発掘によって、今回調査区域と遺物の関連を把握するため、ふるい山路の部分の削平し、ことに西側の廃土を除去し得る限りにパワーシャベルを駆使したところ新しい窯跡（3号窯）を発見した。この窯跡は第1次調査の際、「窯跡より南西15mのところ」に瓦片が若干かたまって出土した。ことにその中には篋書「塩」の文字瓦があった。これ

らの瓦類はきわめて低温の焼成で、不良品として棄てられたものであろう。また、この瓦類出土地点付近は谷水の侵入を受け難い高まりをもっていて操業時には、窯出しや窯詰めにあたって利用した場所で、特定の場所とまでは断じ得ないものである。』（下野古代窯業遺跡〈上〉P 62）と記した場所の西に接した位置にあたる。

そこで、3号窯より東側の山路を削って、かつての1・2号窯に再会した。

3号窯のステ場はCとし、Bと接続することも確認できた。遺物の大多数は屋瓦でコンテナ（34×54×20）120箱以上を採取した。

（大川）

3 遺構と遺物

(1) 3号窯跡

本窯跡は1号窯跡の西約10m、焚口部のレベル差は約1.4m下に位置している。凝灰岩質長岡風化土層を削り抜いて構築した地下式無階無段登窯跡で、主軸方向はN-21°-Wである。

窯体の全長4.5m、前庭部は流失しているが現存長0.5m、幅は焚口部85cm、焼成部最大幅105cmを測る。焼成部と燃焼部の境は焚口部の狭まった部分から幅を広げ、袖の部分の瓦の補強がなくなる、つまり焚口より約85cm付近である。窯壁は厚さ約2cmの焼けた層が堅くなっている。焼成部底面は約20°の勾配で、多数の瓦片が敷き詰められていて、多重焼成を受けており、瓦を垂直に置くために焼台として使用されたものである。

施設は排水溝及び女瓦により燃焼室、焚口の壁を補強していた。排水溝は窯尻より2.6mのほぼ窯体中央部より、主軸にそって幅約25cm、深さ8～15cmの溝を前庭部まで掘っている。この溝には完形あるいはほぼ完形の男瓦の表面を上にして、縦列に重ね並べて覆い、さらにこの上に女瓦の裏面を上にして重ねてあった。排水溝使用の男瓦は焚口より3枚目が有段式で、他は行基式であった。燃焼部内外の側壁には女瓦で壁の補強が行われていた。燃焼部は左壁の補強が良好で焚口より約80cm、右壁は約50cmを測り、女瓦の大型破片の裏面を表に向けて積み立てられていた。この補強は構築時のものではなく、使用途中で補強されたと考えられる。また前庭部においても同様の補強が認められた。

(2) 出土遺物

遺物は須恵式土器が埋土中より数片出土した他は屋瓦類である。屋瓦類は鐙瓦5片、男・女瓦類である。男・女瓦中には文字瓦が含まれており、判読不明のものも含め26点が認められた。

鐙瓦の2は焚口付近より出土し、ステ場C区のものと同接合できた素弁文である。4は外区の破片で、内縁に珠文、外縁に凸波文を施す。

文字瓦はへら書きによる郡名と人名を表わしたものが認められた。郡名は4が「那」、7・8が「塩」、9が「内」であり、「塩」が多数出土し14点を数えた。人名瓦は14の「君麻マ毛人」

1点である。準人名とされる「男」1点も出土した。

(3) ステ場

A区 本区は1・2号窯跡のステ場である。範囲はほぼ東西10m、南北6.5mの楕円形状に認められた。屋瓦類の男・女瓦の出土量はステ場3区の内では一番少なく、約440kgである。なお、文字瓦は1片も出土していない。屋瓦類は鑑・宇・男・女瓦が出土している。鑑瓦は2片が出土し、10は圈唐草文、複弁蓮花文である。

宇瓦は3点で、14はほぼ完形で、中心花をもつ均正唐草文、向って左側隅に範割れ痕があり、1号窯跡出土の宇瓦と同じものである。

B・C区 B区はA区のやや南東、C区とは東側で隣接しており、範囲はほぼ東西5m南北6mの楕円形状を示し、屋瓦の量は他の2区に較べて最も多く、約1.2tに達する。C区の範囲はほぼ径10mの円形状を示し、屋瓦の量は約750kgである。B・C区とも3号窯跡のステ場と考えられる。屋瓦は鑑・宇・男・女瓦などが出土している。文字瓦は判読不明のものも含めて78点が認められた。

鑑瓦はB・C区とも11点が出土している。B区は1が外区外縁に隆線波文、内区は連子が1+6+12を配し、八葉複弁鑑瓦である。3・7~11は圈唐草八葉複弁鑑瓦である。C区は5・6で外区外縁に隆線波文、内縁に珠文を施す破片である。

宇瓦はB区が12・16、C区が15である。12は中心花をもつ均正唐草文字瓦である。15・16は均正唐草文字瓦である。

文字瓦は郡名瓦、人名瓦が出土し、12「中」はB区出土である。郡名瓦「那」は1・2がB区、3・5がC区、「塩」は6がB区、「内」は11がB区、10がC区出土である。

人名瓦はB区が13「丈マ田万呂」、15「大麻マ万呂」、16「白マ若」、C区が17「酒マ□」、18「大麻古万呂」である。 (青木)

4 むすび

今回の調査では、A～C区の3か所のステ場の確認、1・2号窯跡の西側で新たに3号窯跡を発見した。これらから出土した屋瓦類は約3tに達し、ステ場での屋瓦重量はB・C・Aの順であった。ステ場はA区が1・2号窯跡、B・C区が3号窯跡にともなうと考えられた。

文字瓦はいずれもへら書で3号窯跡、B・C区より郡名、人名など約100点が出土した。郡名は37年度検出「塩」、52年度は「塩」に加えて「那」「内」が出土した。今回は3郡の郡名瓦は70余点が出土した。さらに、人名瓦は昭和10年代に田中国男氏により本地区より採集されているが、今次調査においても10数例を発見し得た。

鑑瓦は圈唐草八葉蓮花文鑑瓦に加え、八葉素弁蓮花文鑑瓦や外区に隆線波文や隆線波文に珠

文・凸面波文に珠文を組合せた八葉複弁蓮花文鑑瓦が出土した。八葉素弁蓮花文鑑瓦、外区に凸面波文に珠文をもつ八葉複弁蓮花文鑑瓦は上神主廃寺より出土している。

宇瓦は中心花をもち、範割れのある均正唐草文字瓦及び範割れのないものに加え、新たに国分寺より出土している均正唐草文字瓦が出土した。この均正唐草文字瓦は圀唐草八葉複弁蓮花文鑑瓦と組み合わせられ国分寺に供給されたものと考えられる

以上、本窯跡群は今次の3号窯跡とステ場B・C区の検出により、その焼成屋瓦の供給先は前回の調査で確認された薬師寺、国分寺に加えて上神主廃寺が明確になった。

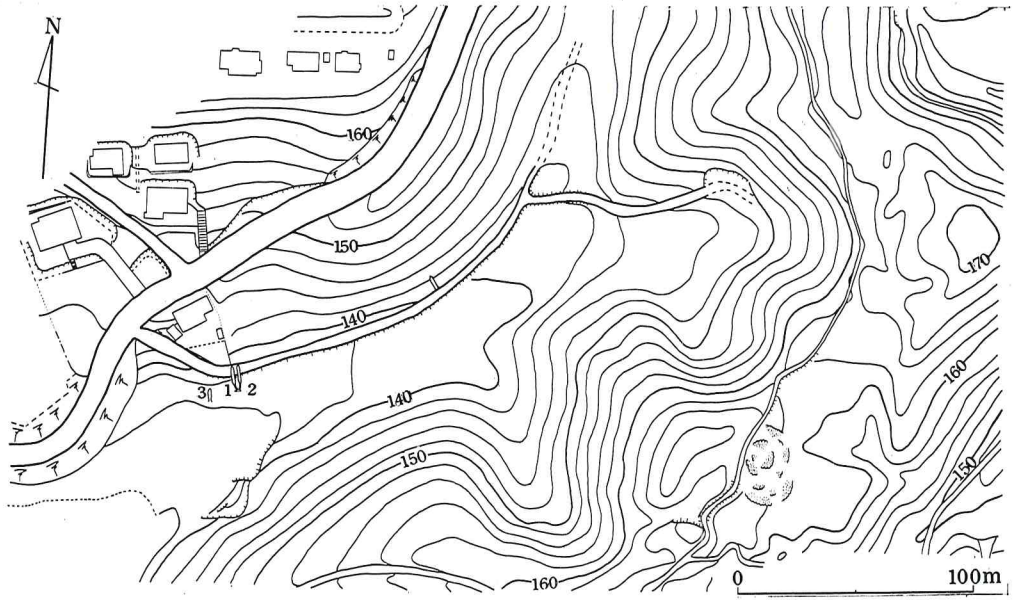
そして、その年代は、天平十三年の国分寺造営を中にして、それより数年前の薬師寺造営の時にはじめてここに瓦窯が開設された。

国分寺造営時にはいち早く、従来、薬師寺の屋瓦を焼いたこの窯場に新たに窯を構築して国分寺用の屋瓦を焼いた。しかも河内以北三郡、つまり塩屋、那須、河内郡の屋瓦が焼かれた。

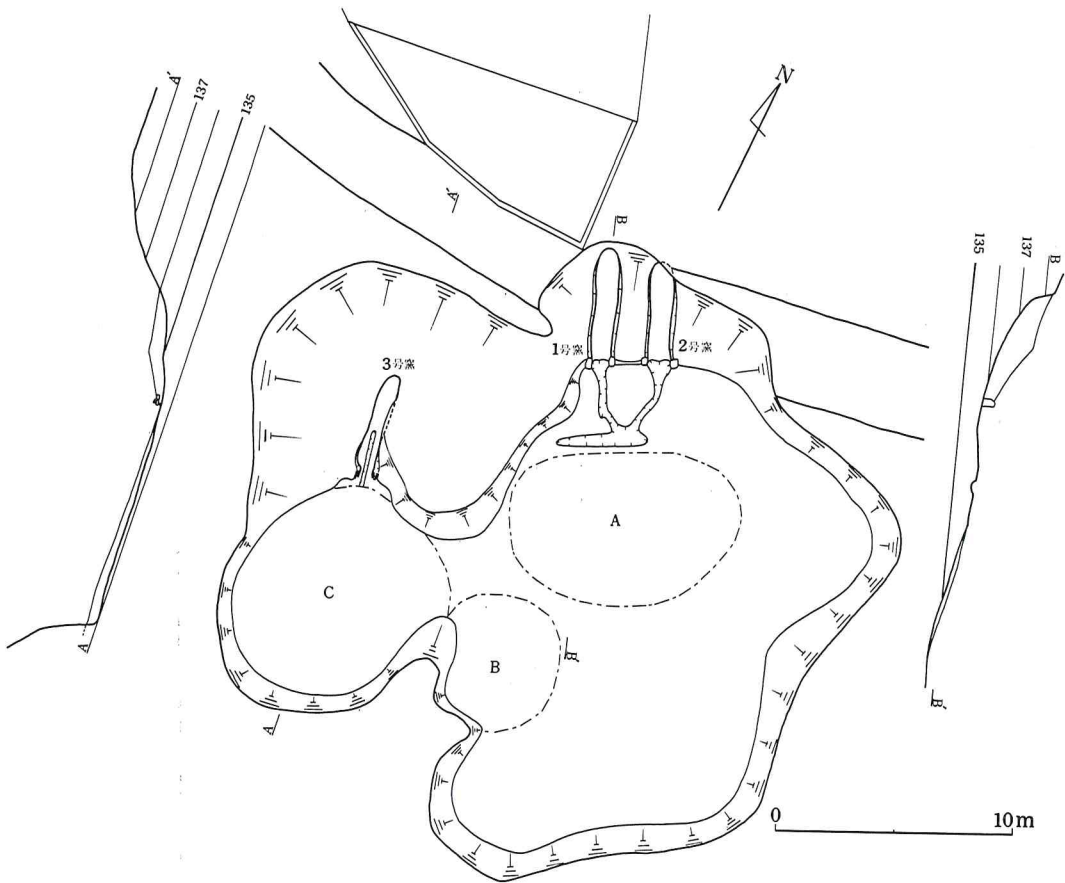
また、河内郡司は自郡の官舎や氏寺の屋瓦をも焼成した。さらに多量の製作に対応すべく、水道山対岸の根瓦瓦窯での新操業が展開されたものと想像できるのである。

何れにもせよ、下野の国の天平時代における薬師寺、国分寺、河内郡衙、氏寺の屋瓦を焼成した生産遺跡であり、その運営は河内郡司によって実施されたものようである。

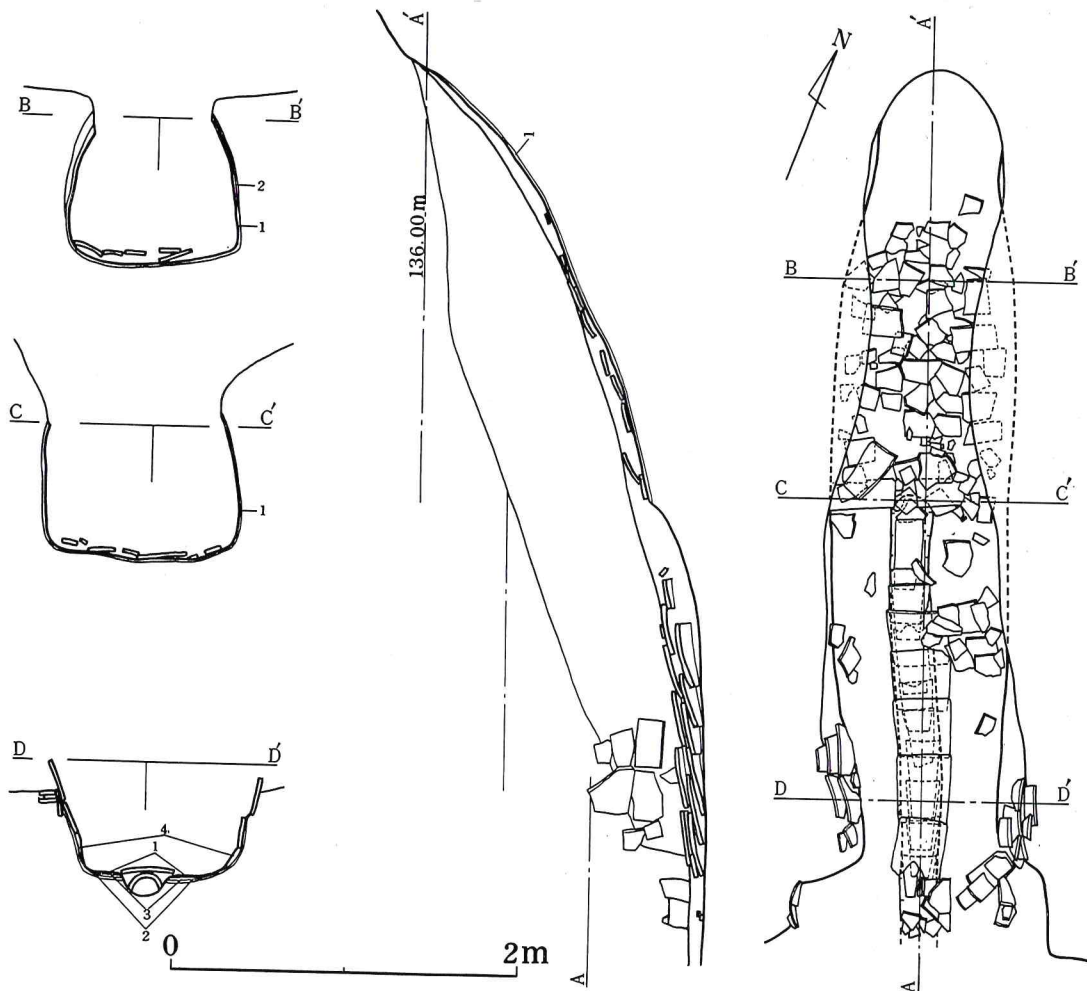
(大川)



水道山竈跡群地形図

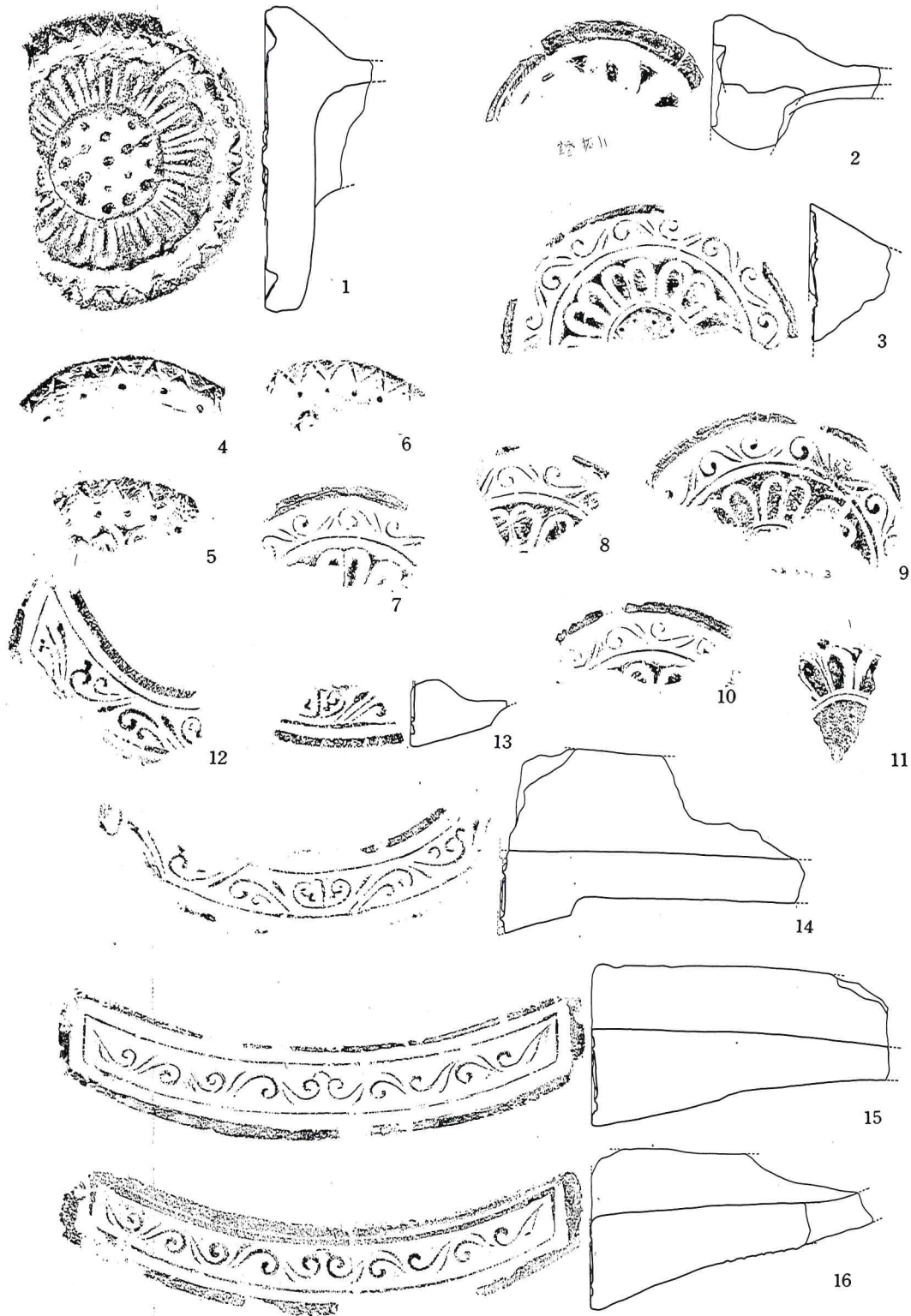


1～3号竈跡・ステ場関連図

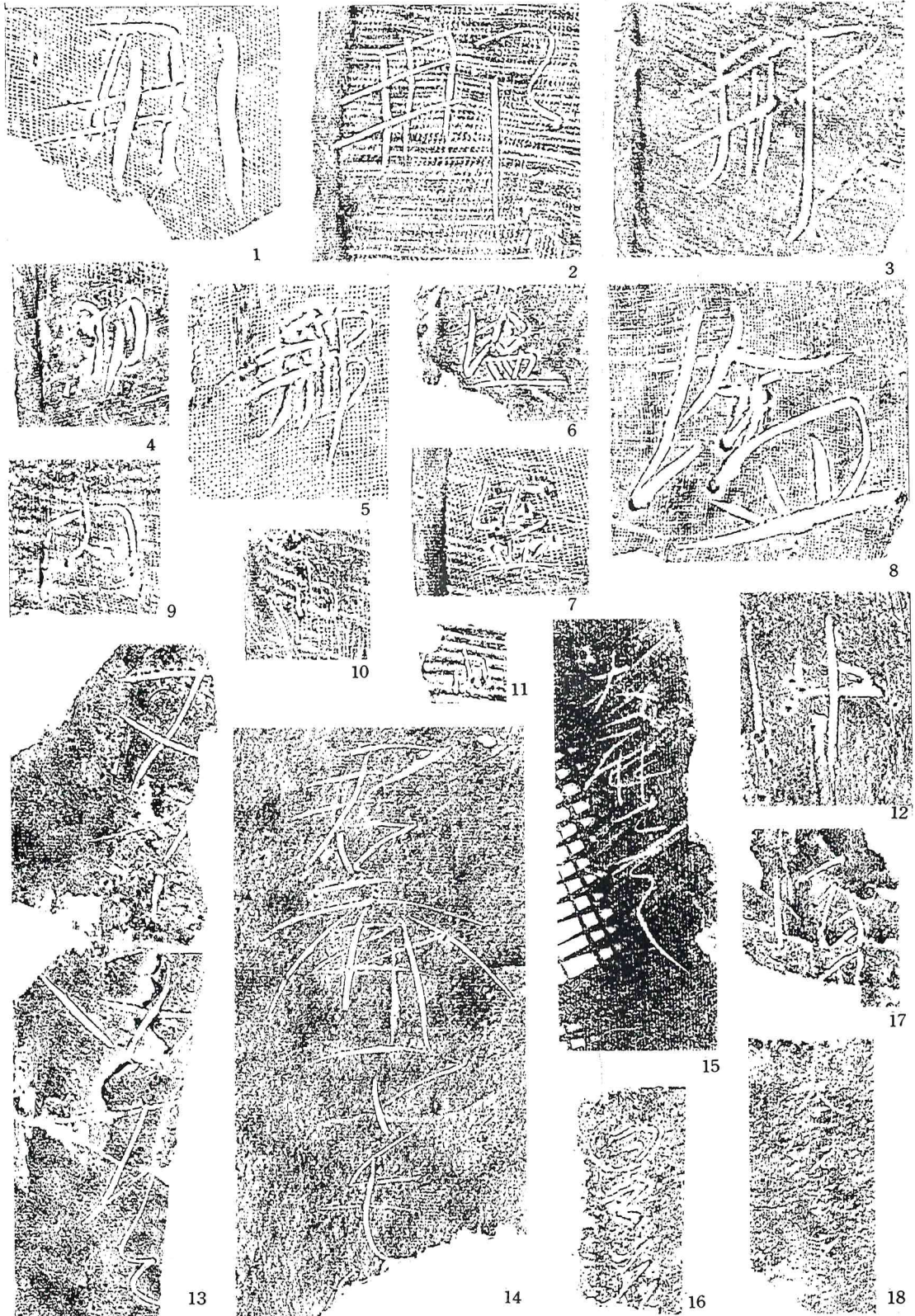


3 号 窯 跡

1. 青灰色土層 (烧固層)
2. 青褐色土層 (準烧固層・烧土層)
3. 黒色土層 (炭火物層)
4. 青褐色土層 (補強瓦固定土)



3号窯・ステ場A～C区出土鏡，宇瓦拓影



文字瓦拓影 (縮尺 1/2)

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第6集
水道山瓦窯跡群発掘調査概要報告
昭和56年2月25日発行

編集 大川 清
発行 宇都宮市教育委員会
(宇都宮市中央1-1-13)
印刷 松井ピテオ印刷
